

## 〔「生命の彩—花と生きものの美術—」展によせて〕 重要文化財 伝毛益筆「蜀葵遊猫図・萱草遊狗図」の修理をめぐって

当館の所蔵する重要文化財・伝毛益筆「蜀葵遊猫図・萱草遊狗図」(図版は「展観のお知らせ」をご参照ください)は、2016年4月から2017年3月にかけて修理がなされ、この展観が修理後初の一般公開となります。本稿では、修理を経て明らかになったことなどをご報告いたします。

まずは本作の概要を述べます。両幅ともに絹本着色の掛軸装で、作者とされる毛益は、南宋時代、孝宗皇帝の治世であった乾道年間(1165~72)の宮廷画院画家でした。本作は両幅の表現上の違いなどから同時代の別の画家の作とみられ、毛益の作であるとは断定しませんが、南宋画院における動物画の質の高さを窺わせる優品として知られてきました。

「蜀葵遊猫図」は、太湖石と立葵の下、長毛種の親猫と4匹の子猫が配され、空には2羽のモンシロチョウが表されます。「萱草遊狗図」も、太湖石と萱草、1匹の親犬と4匹の子犬、地面に小さなオケラが表され、両幅のモチーフの対称性を感じさせます。更に前者の猫と蝶の組み合わせは長寿の寓意であり、後者の萱草は男子誕生の願いを表すことから、両幅ともに吉祥画としての性格も有しています。動物たち、特に親猫と親犬の毛描は細やかで、猫は白色顔料などを厚めに施し、犬は茶の彩色や墨線を重ねて用いることで質感が表されています。

本作は福岡孝悌(1835~1919)から原三溪(1868~1937)の所蔵を経て、昭和23年(1948)に大和文華

館蔵品となりました。重要文化財に指定されたのは昭和11年(1936)のことでした。福岡孝悌以前の来歴は詳らかでないものの、狩野昌運(1637~1702)など、狩野派の画家達が制作した模本が複数伝わることから、遅くとも17世紀には日本に伝来し、珍重されてきたとみられます。

前回の修理がいつ行われたかは判然としませんが、このたびの修理前の本作は、両幅ともに本紙料絹に縦折れと横折れが生じ、折れ山には摩滅損傷がみられるという状態でした(図1-1・図1-2)。これらの折れは放置しておけば更に強くなり、作品に大きな損害を与えかねませんでした。

また修理前の赤外線調査によって、旧修理時の補填箇所が確認されました。両幅共にみられた縦に走る料絹の断裂箇所、及び「蜀葵遊猫図」の立葵の葉周辺と岩座の中央部分、「萱草遊狗図」の萱草部分と岩座の中央部分には、複雑に損傷した跡がみられ、それらには上から補筆がなされていることもわかりました。こうした損傷箇所のいくつかには各々補填絹があてられ、更にその他の点在する細かい欠失箇所を補うためとみられる、平織絹を裏面全面にあてていました。

以上のような入念な状態調査を経て、修理方針を定めてゆきました。修理にあたっては、まず膠水溶液で絵具層の剥落止めを行った後に、表装を解体、本紙にこれまで使われていた裏打紙を、修理の手順に従って除去していきました。旧肌裏

紙を除去した際には、旧補修絹の確認・調整もなされました。今回は補筆のある旧補修絹は除去しないなど、今後の保存に影響のない範囲での処置を施すこととしました。本紙欠失箇所には、電子線劣化絹(電子線を照射することで故意に劣化させた絹)が裏面から補われ、更にその上から補筆が施されました。また折れ跡や今後折れが生じる可能性のある箇所には、折れ伏せ紙(2~3mmの細い带状に裁断した薄美濃紙)を入れ、適宜折れを直してゆきました。裏打紙は新しく取りかえられ、表装裂地や軸首などは元のものを調整して用いることで、再びもどおりの掛軸装に仕上げられました。

今回の修理に際しては、赤外線調査のほか、顕微鏡撮影、蛍光X線解析、X線透過撮影といった様々な科学調査によって、両幅の顔料や素材などを観察する機会があり、それによって様々なことが明らかになりました。まず顕微鏡撮影によって、両幅に使用されている料絹が、経糸の方向を横方向に用いる横づかいの絹であると確認されました。また「萱草遊狗図」の太湖石の下方に、長く伸びる葉二枚が没骨法で表されますが、この植物だけが赤外線反射撮影では映し出されず、他の葉とは異なる描法で描かれていることがわかりました(図2-1・図2-2)。更に両幅ともに、裏面調査において裏彩色が確認され、「萱草遊狗図」の親犬の眼には、裏から赤が施されていることがわかりました。そして裏面から、各部位の蛍光X線解析を行い、両幅に描かれた植物の葉からは銅(Cu)成分、「蜀葵遊猫図」の立葵の花と灰黒色の子猫からは鉛(Pb)成分、「萱草遊狗図」の親犬の眼の赤い

裏彩色からは水銀(Hg)や鉛(Pb)が顕著に検出されるなど、各部位に用いられた顔料の成分が明らかになりました。

他にも、裏面全面にあてた絹を除去した状態で、裏面の透過光観察が行われました。すると興味深いことに、両作品に左右対称の虫損跡が認められたのです。(図3-1・3-2)これはある時期、互いが対面かつ密接した状態で保存されていたことを窺わせます。本作はこれまでにも、もとは掛軸ではなく画冊として保管されていた可能性を示唆されてきました。今回の発見は、そうした従来の推論を裏付けるものともなり、今後両幅が、もともとは更に複数の動物画と合冊されていたとの推測を考察するうえでも重要な発見といえるでしょう。

以上のような修理を経て、「蜀葵遊猫図・萱草遊狗図」は、今まで以上に線描と色彩を鮮明に見ることができるようになりました。本展観では、数百年にわたって多くの人々を魅了し続けてきた本作の、往時の姿をしのんでいただけるのではないかと思います。(都甲さやか)

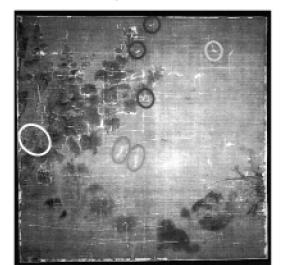


図3-1 「蜀葵遊猫図」裏面の透過光観察。円内に虫損跡

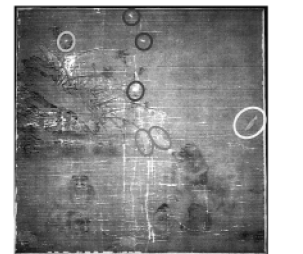


図3-2 「萱草遊狗図」裏面の透過光観察。円内に虫損跡



図1-1 「萱草遊狗図」(部分) 修理前



図1-2 「萱草遊狗図」(部分) 修理後



図2-1 「萱草遊狗図」(部分) 赤外線写真では、円内の2枚の葉が写らない

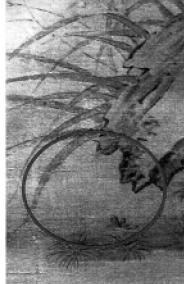


図2-2 赤外線写真